

大災によるコミュニティの分断と回復 —政治学，文化人類学，臨床心理学からのアプローチ—

Disruption of communities due to catastrophe and recovery:
Approaches from politics, cultural anthropology, and clinical psychology

板東 充彦
跡見学園女子大学
Michihiko Bando
Atomi University

飯嶋 秀治
九州大学
Shuji Iijima
Kyushu University

坪井 善明
早稲田大学名誉教授
Yoshiharu Tsuboi
Professor Emeritus, Waseda University

高橋 紀子
福島大学
Noriko Takahashi
Fukushima University

要 約

本稿は、公開研究会のディスカッションをまとめたものである。ベトナム戦争によるコミュニティの分断と回復の道りに関する坪井善明先生の講話を受けて、飯嶋は文化人類学の立場から、国レベルを超えて事象を捉える視点の必然性、臨床心理学が戦争に対して心理戦略的に関わった歴史について指摘し、多重的にトラウマを抱えるベトナムに関わる際のスケール感を講師に尋ねた。高橋は臨床心理学の立場から、家族には支え合いの強さがあると同時に暴力が潜んでいることがあること、福島では焼身自殺の事例があるが、ベトナムでは「恨み」をどう収めているのかについて講師に尋ねた。

これに対し、講師は次の応答をした。「ベトナムでは、産業界、大学、社会貢献という3領域において関わっている。ミクロに現場で問題処理ができること、及びマクロに20~30年後の世界を展望できることができて一流」「日本人の真面目さは狭さ。行動の目標に対しては真面目で良いが、方法はもっと自由になると良い」「日本人は、コミュニケーションが権力関係に結びつきやすい。共に食べて飲むという人としての原点を忘れている」「政治的行為である焼身自殺にまでその人を追い詰めた背景を丁寧に捉えることが大事」「ベトナムでは、毎月1日と15日は祭壇をきれいにするという制度があり、お花を飾ることで皆の心が落ち着く」「この人は本当に私のことを愛してくれていると分かれば、人は心を許す。丁寧に生きることが大事」

【Key Words】大災，コミュニティ，政治社会史，文化人類学，臨床心理学

I はじめに

本稿は、2019年9月29日、跡見学園女子大学で行なったコミュニティ・ソーシャル・アプローチ公開研究会でのディスカッションをまとめたものである。

この公開研究会では、板東充彦(跡見学園女子大学)がコーディネイターとなり、坪井善明先生(ベトナム政治・社会史)を講師に招いた。講話では、ベトナム戦争によるコミュニティの分断と回復の道について話された。詳細は別稿(跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要)にまとめる。この講話では特に、1980年代後半の対外開放後にベトナムの様々なコミュニティに深く関わった経験から、大災がコミュニティに及ぼす影響及びそこからの回復に必要な視点と方法論について、専門の政治社会史の立場から紹介いただいた。

後半のディスカッションでは、指定討論として、水俣の地で長年に亘り実践的フィールドワークに携わる飯嶋秀治(九州大学)が文化人類学の視点からコメントをした。続いて、福島にて東日本大震災後のコミュニティにおけるトラウマケアに携わる高橋紀子(福島大学)が臨床心理学の視点からコメントした。

II 戦争と世代、戦争と学問的知 (飯嶋秀治)

ベトナム戦争の受容で考えると、3世代位に分かれます。坪井先生より上の世代は第二次世界大戦を体験していて、坪井先生の世代は思春期の頃にベトナム戦争があったが僕らの世代になると、もう戦争は知識でしかない。そのため、戦争と学問の関係

を確認しておきたいと思います。

文化人類学では、ひとつの国の経済は一つの国だけで回っているような見方をしたら絶対だめということを最初の方で学びます(ウォーラスティン, 1997)。例えば日本の高度経済成長や戦後復興というのは、一種の神話として自動車産業を始めとした高度経済成長期に頑張りがあったからとされているものの、実際は買い手がいてはじめての消費です。それでいうと文脈的には高度経済成長期の時のきっかけが朝鮮戦争だというのは、社会科学では普通に言われていることでもあります。つまり、私たちが育っていた高度経済成長期の地盤がベトナム戦争などとの関係で、作られてきたという事実があります(吉見, 2005)。

戦争と学問的知という話でいうと、臨床や人類学は、戦争ともすごく関わっているところがあります。有名な例としてアルフレッド・アドラーがあげられる。第一次世界大戦後に戦災孤児が数多く現れました。その際にヨーロッパに児童相談機関のようなものを作って、どういった学校で戦災孤児たちをバックアップするのかという実践が行われた(エレンベルガー, 1980)。その中でセルフヘルプグループも展開しました。

アメリカでは、ミルトン・エリクソンは戦前にグレゴリー・ベイトソンと組んで、ドイツ人を催眠にかけ、日本人との相性について調査した。そしてベイトソンは人類学者のルース・ベネティクトやマーガレット・ミードと戦争協力し、現地の人々が日本軍に反感を持つようなラジオプログラムを、現地の人に聞かせていました。つまり、臨床や人類学の知も第一次から第二次世界

大戦にはそういう形で使われていました。

また精神科医、中井久夫氏の書籍では(中井, 2015), ベトナム戦争を起こす時までには、対面状況で人を殺すというのは大変だった中、何回もメンタルトレーニングをやらせて、殺傷力がものすごく上がったということが紹介されていました。つまり、心理学も治療だけに関わっていただけではなく、心理戦略的側面からも関わっていたといえます。

こうした歴史的事実を知った上で、国策機関に利用される知ではなく、より良いコミュニティとの関係に結び付けていく知を考えていきたいと思います。

Ⅲ 文化人類学と政治学の対話

1. 文化人類学の視点からのコメント(飯嶋秀治)

1) 扱うスケールの大きさ

人類学というのはある程度コミュニティなどを相手にする。民族主義な部分で、現実的には相手にできるのは数百人くらいに会うのがせいぜいで、それをちょっと拡張して日本人はこんな感じだという風にする。では、政治学の場合は、どのようなスケールでどうやって動いているのでしょうか。ベトナムは多重的なトラウマ状態といえる。政治学としてのベトナムに関わる時には、臨床とも人類学ともおそらく違うスタンスで関わるのだらうと思いますが、どのくらいのスケールでどういう風にして関わってきたのでしょうか。

2) 政治学と政治家として動くことについて

また、坪井氏が以前札幌市長選に立候補されたというのを知って、お尋ねしたいこ

とがあります。これは、ベトナム研究のときはベトナム全体のスケールで相手にできるのですが、自分が政治家として動こうとなった時には、市長選くらいのスケールのところに出ようとした、ということでしょうか。例えば文化人類学の場合、海外の異文化研究をやっているとき、文化人類学ではある程度広い文脈で相手が見えるのですが、自分が本当に何を具体的にできるとしたらやはりスケールが小さくなると想像はできます。具体的にどういうスケール感を持ってそういったところに出ようと思ったのかというのを聞きたいと思います。

2. 坪井義明先生(政治学)からの応答

1) ベトナムでの関わり

20年前には無名であった人たちが、今では社会の上層部にいます。私は30年前からベトナムに関わっています。この間に政治的人脈も広く築かれたので、64省のうち30省の知事のことを知っています。そのため随分と忙しくなりました。

インフォーマルな部分で、私は日本とベトナムに関する多くのことに関与しています。産業の領域では、銀行や商社などと連動して動いています。また、ベトナム戦争でアメリカ軍が大量散布した枯葉剤の影響で障害を抱えた子どもたちの国営施設である「平和村」に対して、大学人たちと共に支援活動を展開しています。他には社会貢献活動にも関わっていて、このような3領域に渡って仕事をしています。

日本がもう少し自由で民主的な国になるためには、歴史を知らずにただ目線だけが高いという現状を打開する必要があります。人も国も、一流になるには要件があり

ます。第1はミクロな面で、現場で問題処理を行う能力です。第2はマクロな面で、理論的側面を踏まえて20~30年後の世界を展望できることです。どのような分野においても、ミクロとマクロの両方を視野に入れることで初めて一流の仕事を行うことができます。日本にはまだ一流の人が少なすぎます。必然的に、超一流の人が生まれません。アンビションがなさすぎます。必要なのは、現実的な問題処理を行うのと同時に、この社会・世界・人間の20~30年後の姿を十分に見据えることです。

2) 日本人の狭量さ

率直に言って、私は日本人の真面目さを好みません。日本人の真面目さは、狭さです。行動の目的に対しては真面目で良いですが、その方法はもう少し自由でいいと思っています。その日本人の真面目イコール狭さを突破したい。世のため人のために頑張ることのできる人材を作ることにエネルギーを注いでいます。

「もうこれで十分。これ以上のことはしない」という自己満足とどう対峙するか。私の専門分野である政治学で学んだマクロの視点をもちつつ、ミクロな現場でどのように実践的展開ができるのかを試したいという想いがずっとありました。

IV 臨床心理学と政治学との対話

1. 臨床心理学の視点からのコメント(高橋紀子)

福島で被災地支援に取り組んでいます。今回ベトナムの話の伺う中でヒントをたくさん頂きたい、というところからお尋ねしたいと考えています。

1) 支えあいと暴力

福島の沿岸部には、以前よりは核家族が増えたとされますが、それでも三世代等多世代で暮らす家庭が多くあります。家族同士のつながりが強く家族の中で困りごとを収めようとするといった家族の支え合いの強さがあると同時に、そこには経済的な問題や暴力が潜んでいることもあります。例えば、祖父母の代が経済的な主導権を持っていて、親世代は育児や介護といった役割が強く求められる一方で、家庭内の経済的な事柄に発言権がほとんどない。暴力やひきこもり等が家族の中で隠されて、発見や介入がむずかしくなるということがあります。

ベトナムも、家族や親戚同士の支え合いが強いと伺いました。政治とか行政が機能しない場合、家族や親戚同士の支え合いが、お互いを縛るのではなく健全に機能するには、どうしたところが大切になるのかお聞かせいただけますでしょうか。

2) 戦争体験や被災により生じる「恨み」の収め方

また、戦争や災害による恨みとか呪い、そのお話の中で出てきた日本人は許せないとか嫌いだというのは、直接トラブルのあった対象に何かがあった時にはそこと距離を置くとかいうことで平静を保つことができると考える一方、福島に行って私が今一番どう関わっていったらいいかと思っているのは市民の焼身自殺についてです。

うつ病やPTSDのデータというのはある意味表に出やすく受け入れられやすい印象がありますし、臨床としても自死のハイリスクのケースは自分のところにもつないでもらえる連携はとれるようになってきま

した。地域で自死があった際のポストベンションの相談もあります。ただ焼身自殺については、まず自分のところにその話が来るのはかなり後になってからになります。焼身自殺というのは、死に方としてもとても怒りを感じ、何かとてもメッセージ性があるように思うのですが、それが何だったかがまだ十分に地域で扱えていない印象を受けます。

そのヒントとして、ベトナムの人びとはどのようにやるせなさや理不尽さをおさめてきたのか、教えていただけますでしょうか。私自身の仮説としては、それは臨床心理学やセラピーでどうなるようなものではなく、宗教やアート、何かもう少し違う軸や枠組みが有効なのではないかという気がしています。

2. 坪井義明先生(政治学)からの応答

1) 対話と読書

ベトナムでは、苦労を家族みんなで共有するという文化があります。ただ私は、ベトナムと日本の家族の一番違いは「対話」だと思っています。日本では、コミュニケーションが権力関係に結びつきやすい側面があります。たとえば、金銭をより多く所有している人を捉えて、そこへ権力を付与してしまう。もっと理性的な討論をできるようにするべきでしょう。ベトナムの人たちの言い方は結構厳しいところがあります。でも、暴力ではなく対話を通じて様々な問題を解決して秩序を築いていく能力に優れています。

ベトナムでは、家族皆で食卓を囲みます。例えば、ベトナムの人たちは昼間からお酒を飲みます。その様子を見た日本人は

「ベトナム人は昼間からお酒を飲んでけしからん」などと言うのですが、その理由は、夕食の時間を必ず家族と一緒に過ごすからなのです。そのため夜の宴会はありませんし、その代わりに昼間にお酒を飲みます。昼間に宴会をしながら交渉事もするのです。

一緒に食べて、飲むこと。心が打ち解けて初めて、人は本音を出します。このような関係性がないと、人は親密にならないと思います。日本人はその原点忘れていて。だから、ベトナムを訪れる人たちに対しては、ポケットマネーを使ってでも交流の場を作ります。

暴力を使わないで、自己表現をして人とコミュニケーションできることが人としての基本だと私は思っています。しかし、昨今の日本では、その技術が非常に劣化している。そのような問題意識を感じるため、私はその対策として読書会を長年にわたって開催しています。その読書会は、とにかく本を読み、2000字で感想を書くというものです。圧倒的な読書は大事な営みであり、基本的な文献を読まない人と人や社会のことを十分に理解することができません。そのように考えると、他者と交流する際に読書会を媒介にするのも良いでしょう。宴会の場も大事ですし、多様な場作りを通じてコミュニティの風通しを良くする必要があります。

2) 焼身自殺と心を落ち着かせる習慣

高橋さんご指摘のように、焼身自殺の背後には恨みや憎しみの感情があります。ベトナムでも、仏教徒が焼身自殺をして抗議の意を示したことがありました。この行動が戦争に大きなインパクトを与え、戦局が激変しました。焼身自殺は意思的行動であ

り、政治的行為です。従って、この人を焼身自殺にまで追い詰めることになった背景を丁寧に捉えていくことが大事だと思います。

そして、仏教や占いなど古くからあるものを含めて、ベトナムの人たちは皆、心を落ち着けることのできる何かを持っています。ベトナムには花屋がたくさんあります。旧暦の1日と15日に、祭壇とお墓に必ずお花を飾る習慣が残っているからです。目をふさぎたくなるような不快な現実があるからお花を愛するという側面もありますが、1日と15日は祭壇をきれいにするという制度の存在も大きいです。定期的にお墓参りをすることで、ベトナムの人たちの心は落ち着きます。

V おわりに(坪井義明)

日本人は、非欧米圏では先進国であり、世界第三の経済国であるという誇りを持っている。しかし、現実は一週遅れ、二週遅れのトップランナーです。自分たちの認識以上に成長している世界や社会が動いている、という現実感覚を持つ必要があります。昨今では、インドを含め、欧米よりもアジアに活気があります。日本は、その活気を取り込むことを考えるべきでしょう。

私が現在の日本に対して強い危機感を抱いているのは、便利さの名のもとに様々なことが雑になっていることです。小さなこと、些細なことが大事なのです。ベトナムでも、たとえば「なぜ花がこんなにたくさんあるのですか?」というように、丁寧に物事を見ることです。その積み重ねにより、人や社会の垣根を越えることができます。それは、上から越えるのではなく、深

みに入るとのことだと思います。人に対して丁寧に生きていくことにより、「この人は本当に私のことをよく考えてくれているんだ。よく知ってくれているんだ。愛されているんだ」という感情が起こる。そう思えると、人は心を許すのでしょうか。

ベトナムは、外国人に痛めつけられた経験を持つ国です。そのために、外国人に対する不信感が色濃く残っています。しかし、「この人は日本人でも、ベトナムのことを本当に愛しているのかもしれない。ベトナムのことを自分たち以上に分かっているのかもしれない」と感じて警戒心が氷解したら、家族の一員として迎えてくれるようになります。

ベトナムの人たちには、より幸せになってほしい。これほどまでの苦悩を体験していた人たちには、少しは幸せになってほしい。そういう気持ちで仕事をしています。このような関わりを続けていると、相手が垣根を外してくれる。境界を越えてくれる。「丁寧に生きる」ということが大事なのです。

参考文献

- ウォーラーステイン、イマヌエル(著)、川北稔(訳)(1997). 新版 史的システムとしての資本主義. 岩波書店.
- エレンベルガー、アンリ(著)、木村敏・中井久夫(監訳)(1980). 無意識の発見—力動精神医学発達史. 弘文堂
- 中井久夫(2015). 戦争と平和 ある観察. 人文書院.
- 吉見俊哉(2005). 鶴見良行とアメリカ—もうひとつのカルチュラル・スタディーズ—. 『思想』No.980. 201-222.